

苦難の  
時にも

WHEN  
GOD  
DOESN'T  
MAKE  
SENSE

**DR. JAMES DOBSON**

ジェームス・ドブソン著

ファミリー・フォーカス出版

### 献呈の辞

この本を、感謝をもってロンドンのウェストミンスター・チャペルの牧師である R・T・ケンドール博士にささげます。本書の最終稿を準備するに当たって、博士の大変貴重な洞察と提案をいただきました。このような人物とお近づきにさせていただきます。ただいたことはまことに光栄です。

WHEN GOD DOESN' T MAKE SENSE  
by  
JAMES C. DOBSON

Copyright ©1993 by Tyndale House Publishers, Inc.

日本語翻訳権……ファミリー・フォーカス・ジャパン

聖歌 163 番使用……日本音楽著作権協会 ( 出 ) 許諾第 9704748-701

特別な但し書きがない限り聖書の引用は新改訳聖書です……日本聖書刊

行会承認番号聖第 508 号

私が一九九三年に「苦難の時にも」(原題 "When God Doesn't Make Sense")を著わした目的は、説明不可能な人生上のことからや悲劇的な出来事が起きる際に私たちの心に湧きあがる様々な疑問について探究することにあります。それからまもなく五年が経とうとしています。二十世紀の終りが目前に迫ってきた今、私たちの住む世界はますます混乱の度を深めるばかりです。

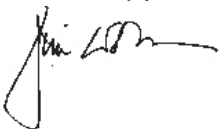
実に、変わらないはずの道徳基準は崩壊し続け、世界の隅々に至るまで個人と家族とを大混乱に陥れています。世界の他の国々の例にもれず、日本も、違法薬物、性的逸脱、増加する犯罪に悩まされており、また現代社会に浸透した「すべての真理は相対的なものである」とする風潮の荒波を受けています。加えて、日本は、二十世紀も末近くになって悲劇的な大災害を経験しました。特に痛烈であったのは、六千人の命を奪い、三万五千人の負傷者を出し、三十万人の住居を破壊し、十三兆円以上もの日本の経済を根底から揺さぶった一九九五年の阪神大震災です。しかし、困難と心痛の種が渦巻く中にも希望はあるのです。一九九三年に原著の中で私が伝えようとしたメッセージは、「主よ、なぜですか。」と苦しみうめく、どの国のどんな人にとっても、今も変わらず有効なのです。地上においては、安楽な人生を保証

されている人などだれもいません。「わたしは決してあなたを離れず、またあなたを捨てない」という、創造者ご自身の御口から語られた、揺るぐことのない約束以外に何の保証もないのです。

以下に続く本文をお読みになるとき、読者自身の人生において遭遇した困難に匹敵するものをきつと見い出されるでしょう。主が読者の心に直接語りかけ、主の愛と配慮とはどんな場面においても溢れていることを、皆さんの心に刻みこんでくださるようにお祈りいたします。

一九九七年三月

米国フォーカス・オン・ザ・ファミリー代表  
ジェームス・ドブソン



# 目次

献呈の辞 3

日本語訳のためのまえがき 4

第一章 神を見失った時 9

第二章 不信の壁 37

第三章 神は、たとえ理解できない時にも… 61

第四章 受け入れよ。さもなくば… 95

第五章 主は私たちを救い出します。しかし、もしそうでなくても… 119

第六章 質問に答えて(一) 149

第七章 逆境の原理 181

第八章 不屈の信仰 205

第九章 罪の報酬 223

第十章 質問に答えて(二) 245

第十一章 不信の壁を越えて 271

注 311

第一章  
神を見失った時

WHEN  
GOD  
DOESN'T  
MAKE  
SENSE

チャック・フライは、頭脳明晰な十七歳の若者で、学業に優れ、意欲にあふれていました。首席に近い成績で高校を卒業し、大学に進んだ彼は、そこでもやはり優秀な学生でした。理系大学を終えると、彼はいくつかの医大に願書を出しました。し烈な競争率は当時も今も変わりません。その頃、私は南カリフォルニア大学医学部の教授でしたが、六千人の志願者のうち、毎年たった百六人しか受け入れられないという厳しさでした。認定医大としては当時ごく当たり前の数値でした。この高い競争率を突破し、チャックはアリゾナ大学医学部に合格し、その秋の九月には、もう医学生としての第一歩を踏み出していました。

その第一学期、チャックは、自分の人生における神のご計画は一体何だろうかと考えました。高収入で安定したハイテク医学に従事するのではなく、どこか外国の地で仕えるのが、自分に与えられた使命ではないかと思いはじめようになりました。この思いは大きくなるばかりで、やがては彼の究極的な目的とまでになりました。ところが学年の終わりになると、どことなく体の調子が悪くなり、常に何とも言いようのない疲労感にさいなまれました。五月に検査を受け、白血病と診断された彼は、十一月にはもう亡き人となっていたのです。

悲しみにうちひしがれた彼の両親、そして私たちはこの不可解な神のわざをどう説明したら良いのでしょうか。この青年は全身全霊をもってイエス・キリストを愛し、主のみこころを求めたのではなかったのでしょうか。それなのになぜ、人生の絶頂期にその生命を取り去られてしまったのか。信仰深い家族、友人たちが胸の張り裂ける思いで祈ったそれらの祈りに、なぜ主は正面きって「ノー」という答えを出されたのか。なぜなのか。

毎年、何千という医学生が母校を巣立ち、医者としての道を歩み始めます。中には、感心できない動機で医学を目指す者も少なくありません。世の中の底辺にいる人々のために尽くそうとしている医者はごくわずかです。しかし、ここに素晴らしい人材が一人いたのです。もし彼が生き延びていたら、絶望の中で苦しみながら死んでいく貧しい人々を数え切れぬほど治療してあげたことでしょう。チャックの究極の望みは、肉体のいやしにとどまらず、この、もつとも素晴らしい福音をまだ聞いたことのない人々と分かち合うことでした。チャックの死は不可解です。チャック・フライ医師の温かい手が触れたであろう多くの重病人を頭に思い描いてください。癌患者、結核患者、先天性の病、そして痛みの原因も分からないような幼子たちを。全知全能なる神は、フライ医師の献身的な奉仕をなぜこれらの人々から奪い取ったのでしょうか。

チャック・フライ君についての全体像をつかんでいただくためには、もう一つの物語を話さなければなりません。医学部一年生の三月、チャックは婚約します。相手は、

カレン・エルンストというやはり献身的なクリスチャンでした。婚約後六週間して彼女はフィアンセの不治の病を知らされます。それでもカレンは、予定通り結婚する道を選びました。七月に二人は夫婦となりましたが、それからたった四か月後に新郎は帰らぬ人となっていたのです。その後、カレンはアリゾナ大学医学部に入学し、卒業後は医療宣教師として、アフリカ南部のスワジランドで現地のクリスト教病院に一九九二年まで奉職しました。孤独の中で、彼女は「なぜ、優秀で若いわたしの夫が、共に宣教活動に従事することを許されなかったのか」という疑問に悩まされたに違いありません。私もまた同じ疑問にぶつからざるをえません。

チャック・フライ君の生と死が私たちに投げかけている人生についての疑問を、世界中の優れた神学者たちが今後半世紀の間考え続けたとしても、納得のいく説明は期待できないでしょう。この青年の生と死についての神の目的は謎であり、謎のまま残るでしょう。医学の学びを終えないで亡くなるくらいなら、何故多くの祈りに答えて、チャックを医学部に入れてくださったのか。チャックが確信した宣教への使命は一体どこから来たのか。使わずじまいになるくらいなら、神は何故あんなに多くの才能をこの青年に与えたのか。なぜ彼のように賢明で、将来有望な学生の生命が断ち切られ、一方では麻薬中毒者、アルコール中毒者、悪人たちが長生き

して社会の重荷になっているのか。答えがでるようななまやさしい問題ではありません。しかもそういう問題は実に多いのです。

私の四人の友人の命を奪った一九八七年の飛行機事故の理由を、主はいまだに明らかにしてくださっていません。彼らは実に立派なクリスチャンでした。ヒューゴ・シヨールコフは実業家で、フォーカス・オン・ザ・ファミリーに欠かせない非常に有能な理事の一人でした。ジョージ・クラークは銀行の頭取で、人並みはずれた才能の持ち主でした。トレバー・メイブリー医師は優秀な外科医でした。患者の半数近くに無料で手術を施し、経済的に困っている人に対しては心からの同情を示しました。そしてクリス・デビスは、多くの人に愛され親しまれた牧師であり著者でもありました。彼らとの親交は深く、定期的に集まって聖書を共に学び、学んだ事柄をいかに実践しているか、互いに励まし合う間柄でした。かけがえのない友人でした。どんなに私がこの四人の友を慕っていたことか。最後となるあのフライトの前夜、私は彼らと親交を温め合っていたのです。その後、双発機はワイオミングのアブサロカ山脈に墜落し、生存者は一人もいませんでした。あとには妻と子供たちが残され、夫や父のない毎日と戦っているのです。なぜなのでしょう。この悲劇によってどんな目的が果たされたのでしょうか。残された子供たちの中で最年少に当

たるシヨールコフ家の二人の子供たちは、成長期のもっとも大切な時に、英知と愛に満ちた父親の影響を一瞬にして奪われてしまったのです。何のために。主はシヨールコフ夫人に一人でも苦境に耐える知恵と強さとを与えてくださいました。しかしやはり私にはこの悲劇に関する説明も答えもないのです。

「人生の大きな疑問符」ということばでまず第一に頭に浮かぶのは、我々にとつて大切な友人であるジェリー・ホワイトとメアリー・ホワイトのことです。ホワイト博士は、国際的な伝道団体であるナビゲーターの主幹です。二人は主を愛し、聖書の教えに従って歩んでいる、信仰の夫妻です。実は彼らも既に苦悩を十分体験しているのです。二人の息子であるステイブは、報道関係の就職先を探していた数か月間の間、アルバイトでタクシーの運転手をしていました。しかし、その夢はかなわぬまま終わつたのです。ある深夜、ステイブは精神錯乱の乗客に殺されてしまいました。普段は平穩で、安全なコロラド・スプリングスの町で。犯人は、犯罪歴の多い麻薬中毒者でした。逮捕された男は、やってきた運転手であればだれでも撃ち殺すつもりで、その夜タクシーを呼んだと警察に語りました。どの運転手がその男を客としてもおかしくなかったのです。が、タクシー会社の電話に答えたのはステイブ君でした。それは理由のない無差別殺人でした。しかも長年クリスチャ

ン・ワーカーとして神を崇め、神に仕えてきた一族の上に降りかかってきた悲劇でした。

また数年前、竜巻で破壊されたテキサス州ダラスの、ある教会のことを思い出します。荒れ狂った空から竜巻が突然この教会をおそい、破壊のターゲットとしてねらいを定めたのです。そして教会以外の建物には何の損害も与えずに去つていったのです。もしあなたがこの教会の会員であつたなら、この「神のわざ」をどう解釈するでしょうか。「教会内で何か主のお気に召さないことがあつたのだろうか。」いいえ、主が竜巻を用いてそんなことを指摘されるとは思えません。これが、クリスチャンの不従順に対する神の懲らしめのむちであるとしたら、遅かれ早かれすべての教会はそのむちの犠牲になつてしまふでしょう。としたら、この竜巻の、あたかも獲物をねらつたかのような破壊行為をどう説明したらよいのでしょうか。全くお手上げです。ただ時として、人生には説明のつかない、理解のできない事が起こりうる、としか言いようがありません。

持つて行き場のない悲しみや苦境の実例を挙げれば、世界一の大きな図書館も埋め尽くされてしまふでしょう。しかも、世界中の人が自分だけの体験を提供できるはずで。戦争、飢餓、病、災害、また思いがけない死など、決して納得できるも

のではありません。時には、先に述べたような大規模な災害よりも、我々が個人的に経験しなければならぬ試練の方が、心の整理が難しいものです。癌、腎不全、心臓病、乳幼児の突然死、脳性麻痺、ダウン症、離婚、強姦、孤独、拒絶、破産、不妊、伴侶との死別。これらは、わたしたちのたましいを悩まさずにはおかない数多くの苦しみの一部に過ぎません。「なぜ神はこんなことを私に」という疑問に、すべての信者と多くの異教徒が苦しめられてきました。そしてある信者たちの教えとは裏腹に、神はご自分のなさることを急いで説明されないのが普通なのです。神にはご自分のことを我々人間に説明する義務があるとお考えの方がいるなら、次の聖句をよくお読みください。

「事を隠すのは神の誉れ。」(箴言二五・2)

「まことに、あなたはご自身を隠す神。」(イザヤ四五・15)

「隠されていることは、私たちの神、主のものである。」(申命記二九・29)

「あなたは妊婦の胎内の骨々のことと同様、風の道がどのようなものかを知らない。そのように、あなたはいつさいを行なわれる神のみわざを知らない。」(伝道者の書一一・5)

「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。主の御告げ。天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」(イザヤ五五・8～9)

聖書は、無限なる神のみことごと、神と人間との関わりとは、私たち人間には到底理解し尽くせないとはつきり教えています。「理解できる」と思い込むのは何とどう傲慢でしょうか。私たちが全知全能の神を分析しようと試みることは、アミーバが人間のいとなみを理解しようと悪戦苦闘しているようなものです。ローマ人への手紙一章三三節には、神のさばきは「知り尽くしがたく」神の道は「測り知りがない」とあります。同じく第一コリント二章一六節には「だれが主のみことごとを知り、主を導くことができたか」とあります。主が自ら明かそうとなさらない限り(たいていの場合なさらないのですが)主のみことごと目的も、被造物である私たちの知りうるどころではありません。つまり人間の持つ様々な疑問、特に「なぜ」で始まる疑問の多くは当分の間、答えのないまま残されるということです。

第一コリント一三章一二節において使徒パウロは、答えのない疑問という問題に

ついで次のように言及しています。「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになりました。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」永遠のいのちに至って初めて全体像がはつきりするのだと、パウロは説明しているのです。彼がここで暗示しているように、今は不完全な姿を、それはそれとして受け入れることを私たちは学ばなければなりません。

人生には、つじつまが全く合わないことが時にはあり、神がまるで自己矛盾しているように見える時もあるものだということが、理解できない若いクリスチャンが大勢いるし、残念なことに年輩のクリスチャンですらそのような人々がいるのです。クリスチャン生活のこういう側面はあまり語られません。新生したばかりのクリスチャンに対して、この世的な心理に訴えかける魅力的な神学しか教えない傾向があるからです。たとえば、私がとても高く評価している「キャンパス・クルセード」という伝道団体があります。彼らは「四つの法則」という小冊子を何百万も配布してきましたが、その第一の法則には、「神は、あなたを愛しておられ、あなたにすばらしい人生を与えようとしておられます。」とあります。これは確かに真実です。しかし、一方これを読むと、信者はこの素晴らしい計画をいつも理解でき、また受け

入れられるものである、という印象を受けます。しかし、現実はそうとは限りません。

四肢麻痺の障害を持つジョニー・エレクソン・タダさんのように、ある人にとってこの「すばらしいご計画」とは車椅子の生活を意味します。預言者エレミヤにとってそれは、暗い牢獄に入れられることでした。また聖書に見られる多くの登場人物にとつて、それは処刑さえ意味しました。しかしながら、もっとも耐え難い状態にあっても、神のご計画は素晴らしいのです。なぜなら、すべてのことが神のみこころに調和し、最終的には「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださる」(ローマ八・28)からです。

「なんだかわけが分からなくなつた。」という方がいらつしやるかも知れません。特に、青春のただ中にいる方々にとっては、体の不調もなく、苦難や失敗や悲しみとは無関係な平和な小世界に住んでいるかぎり、何もかもうまくおさまっているように思えるのは当然でしょう。いまの状態が永遠に続くように錯覚してもおかしくありません。だからこそ、この時期に何らかの問題にぶつかると、霊的に大混乱し信仰は大きく揺れるのです。

医師リチャード・セルツァーは外科医であり、文筆家でもあります。彼は、その

優れた文章力を駆使して患者と彼らの出会う人間ドラマを描き出し、私の好きな著者の一人でもあります。その著書『若き医者への手紙』のなかで、彼は次のように言っています。人は、ほんのうす皮一枚でおそろしいものからしばらくの間守られているかのように見える。われわれは毎日この危険の中を歩き来しているにもかかわらず、ほとんどその存在に気づかない。免疫組織がバクテリアの見えない危険から人体を守ってくれているように、私たちはうす皮一枚で生死に関わる危険から守られている、というのです。もちろん、すべての若者が守られているわけではありません。幼くして癌や先天性の心臓疾患やその他の様々な病気で死んでいく子供もいます。しかし、私たちのほとんどは守られているながら、それに気づいていません。そして年を重ねていくうちに、悲劇は突然やってきます。「一枚の皮」が裂けて、恐怖が一人の人の人生に、あるいは愛する者の人生に忍び込みます。予想もしなかった神学的危機が到来するのは、この瞬間です。

ここで私が言いたいののは、私たちの天の父なる神が、ご自分の傷つきやすい息子や娘に対しては無関心、無頓着で、ちっぽけな人間などは悲惨な宇宙の笑い種としてあざけているのだ、というようなことではもちろんありません。そのようなためな考え方は神への冒涇でしょう。聖書の随所に、神は限りなく愛と優しさにあふれ、地上の子らを温かく見守り、忠実に歩む者を一步一步導いてくださるとあります。主は私たちを「その牧場の民、その御手の羊」（詩篇九五・7）と呼んでいます。この偉大な愛こそが、そのひとり子イエス・キリストを私たちの身代わりとして、この世に送ってくださいだったので。イエス・キリストの身代わりの死によってのみ、私たちは受けるべき当然の罰を逃れることができます。「神は、実に、そのひとり子をお与えになつたほどに、世を愛された」（ヨハネ三・16）からです。

使徒パウロは言っています。「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」（ローマ八・38〜39）。イザヤは、同じメッセージを父なる神のご計画として直接私たちに伝えました。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」（イザヤ四一・10）。神の愛とあわれみには疑いの余地はありません。それでも、私たちの疑問は残ります。

ここで私の頭からどうしても離れないのは、理解できない状況の中で苦闘している兄弟姉妹たちのことです。この人たちのためにこそ、私はこの本を書こうと思